もし著者が、そういう歪んだ資本主義を何とか変えなければならないというところから出発したならば、現実の農村で農民的土地所有が確立されていないために資本主義的な分解が妨げられているという事実が見逃されるはずはなかつたと思うし、寄生地主的土地所有が、世直し一揆の中にあらわれた農民的土地所有の要求を圧殺した上に成立したということが明かとなり、すなわち農民的土地所有の確立と分解の上にそれが成立したという理論は出てこなかつたと思う。

このように農民的土地所有を成立させようとする世直し一揆の視点から分析がおこなわれたならば、同じ方法でもつてしても村落支配者層の進出だけを一面的にとり上げ、歴史に対する見方をせまくすることはなかつたと思う。そうすれば、打こわしに直面した村落支配者層が、崩壊寸前の幕藩領主との間にもつ矛盾の表現である尊攘討幕運動と、その結果成立した「有司専制」の明治政府との間に生ずる矛盾の一表現としての自由民権運動とはおのずからその本質を異にしたものとして把握されたはずである。経済主義の克服は、そうした立場からひとつひとつの階層の間の矛盾を明らかにしてゆくところからはじめて可能となるのではないだろうか。

以上において、わたくしはかなり無しつけな、また現に学恩をうけつつある著者に対して甚だ非礼なことばの数々を重ねたが、それらは全く著者の出した問題をわたくし自身の問題として、ひとごとならぬものとして受けとつたところからきたものであることを明らかにして、著者並びに読者のおゆるしを得たいと思う。（二二〇頁　三〇〇円　有斐閣）

—朝尾直弘—

京都大学東洋史研究会編
中国随筆索引

久しく待望されていた中国随筆索引が京都大学東洋史研究会編として刊行された。菊版千餘頁の巨冊である。売価千円というような低廉な価格で研究者の座右に備えることの出来るようになつたことは、黙々と多年この書の編纂に従つた人たちのみならず、われわれの心から喜びとすることである。巻頭には宮崎教授の序文が巻末には佐伯助教授の跋文があり、この書の成立した経緯やその内容や意義などを述べ、あたかもよき解説的役割を果している。佐伯富君をはじめ荒木敏一・愛宕松男・岡本午一・池田誠・岩見宏君らの諸学士が昭和二十四年以来、月一回づつ東洋史の研究会を開き、爾来二百回にも及んでいるのであるが、同会の一成果として本書は出来上つたものという。

唐から清末に至るまでの小説・故事・遺聞・掌故・考証などに関するいわば随筆雑書となづけらるべき百六十種について、その内容の題目を収録し、これを題目に使用されている主要語によつて五十音の順に排列し、検索するのに便利ならしめたものである。唐が三、宋が四八、金が一、元が三、明が一九、清が七九。太平広記のごとき巻数の多いものを初め、夷堅志・容斎随筆・癸辛雑識・東京夢華録・武林旧事・輟耕録・湧幢小品、或はまた事物紀原・困学記聞・日知録・陔餘叢考・二十二史劄記などの主要な書を網羅している。「この中には堂々たる考証的論文があるかと思えば或は正史の欠を補うに足る貴重な史料が潜んでいる。しかも各篇の題目目録が巻頭に集められているのはよい方で、時に各巻に分散していたり、時には全くない場合もある。中国随筆索引はこの不便を緩和する使命をもつて現わされたものに外ならない」と宮崎博士が推賞せられておられるよう

に、東洋史やシナ学の研究者にとつて甚だ便利、否欠くことの出來ない書物であるということが出來るであろう。

そもそも経書などをはじめとし、古來の文献を渉猟し、故事や成語を暗記して、自作の詩句や文章に自由に採り入れるということは中国の過去の読書人には欠くことの出來ぬ教養であつた。しかしそれがいくら彼等の資格だといつても博覧強記の人ばかりではなく、汗牛充棟もただならない書物に対しては時間や労力の無駄をいくらかでもはぶかんがために便利な適宜な編纂を行うということは誰しも考え付くべきことがらである。そうした要求を満たすものの一例として類書の編纂があげられるであろう。皇覧や纂要はしばらく措くとしても、宋代には太平御覧・冊府元亀・玉海の類、明代の永楽大典、清代の図書集成・淵鑑類函・佩文韻府・駢字類編等々と数えあげてみたのみでも頗る多く、われわれにとつて今日も甚だ便利な書物となつている。しかしこれらは中国の伝統的学問の上に編纂されたものであるからその目的や利用について自ら制約のあるのは如何ともし難い。これに対し中国古文献の科学的研究の必要から、新たに索引書の編纂が行われるようになつたのは極めて最近のことであり、中について最も注目されるものは米国のハアバート大学中国研究所の事業として行われた索引編纂事業であろう。北京の燕京大学内に引得編纂所を設けて仕事を開始し、民国二十年以來陸続としてその成果が刊行され、ことに翌二十一年には索引作成の方法論を述べた引得説という書物すら著わされ、現在までに約五十種類のものが刊行されている。

わが国における中国文献の索引作成もまたこれと前後して漸く盛んとなつたものであり、ことに京大の東洋史研究室においては桑原・羽田諸博士の主唱あるいは指導のもとに史記・漢書・後漢書乃至遼・金・元史、または冊府元亀奉使部などの索引作成が行われた。佐伯助教授らの索引編纂もまたそうした影響を多少とも受けておられると解される。しかし、これはささやかなグループによる研究会の成果として生れ出でたものであつて、いわば下から大きく盛り上つたものであり、その過程において差違を認めないわけにはゆかない。さきに同会の諸君によつて油印された資治通鑑胡註索引の恩恵を受けている一人として、ここに本書を手にし、その地味な労苦に対して心から感謝せずにはおられないのである。太平広記や容斎随筆などについての引得はすでにあるのであるが、百六十種というような多数の書の題目を一書に集めて索引に便したというようなことは誠に初めての企てである。したがつて学界に寄与することの多いのは繰返してここに述べるまでもないことであろう。

なお蛇足ながら一言附記させていただきたいことは以下のような点である。編者らは慎重な用意をもつて、一題名中の主要語句の掲載を一回に限つていない。だからその検索が一所で見当らなくても往々他の場所で求めうるようにしているのである。しかるに、利用者が関係の語彙を忘れた場合、或は同類の題目を求めようとした場合においては、甚だ勝手な注文ではあるが、一応大まかな編目(類目)を定めて大別し、その目内においてさらにこのようなシステムで配列していただけたならより以上便利であつたのではあるまいかと考えられることである。漢字の性質として一字項のもとに同類の題目が意外に多く集つている場合が少くないのであるが、ただ一字が共通しているということだけで時には随分異つた内容のものが一見雑多に集まるという惧れもあるのである。勿論、類目によつて

大別する場合はそれに収め難い題目もあらわれるばかりでなく、検字表などが頗る複雑したものとなる。したがつてそれらも長短があり、何れを可とするか、却つて議論が多いかも知れない。幸に続編も編纂中のことといわれるから、その際かかる問題について実際的な意見を示していただき度いものである。

（発行者　日本学術振興会　発売所　丸善株式会社　定価千円）　—小野勝年—

アイリーン・パウア著
三好洋子訳

中世に生きる人々

中世がルネサンス的・啓蒙主義的な偏見の彼方から掘り出されてより、すでにかなりの日子が経つた。中世にも平凡な、だが多彩な民衆の生活があつたということは、自明なことだが、今日ほどに共感を呼んでいるときもない。今世紀における中世社会経済史の画期的な発展がこれに寄与するものであつたことは、いうまでもないことであるが、また一方社会発展法則への熱烈な関心が、ともすればそこに動いた人間を化石化した傾向も蔽いえなかつた。元来究極においては、真の人間復興にこそ参与すべきものであつた社会経済史学が、固牢な概念と事実の凝結に陥るとき——その懸念あるとき、私は問題なく、このアイリーン・パウアの一書をおすすめする。故パウア女史は人も知る英国社会経済史学界の泰斗、その不朽の業績については簡単には訳者の「あとがき」を参照せられたい。しかしなによりも本書において魅惑的なものは、このような研究業績の背景の上に立つて、人目につかない中世民衆——農民ボド、マルコ・ポーロ、尼僧院長マダム・エグランティーン、パリの一主婦メナジエの妻、ステープル商人トマス・ベトソン、ある織元トマス・ペイコック——の生活の諸相を円熟した筆に上せている点にある。読者は広汎な社会史的背景の中に、しかし、動いている、感情をもつた人間像に接することができるのだ。しかも女性特有の繊細な洞察眼は女性を描いてますますさえているように思われる。ともあれ、名もなき人間と国土への愛着は、厳密な史料によつた本書の叙述をくるむ芳香だ。

さて、埋草のすさびにまかせ、あらずもがなの言葉を連ねたが、これも一つは、この古典的名著をふたたび、われわれに近づけてくれた訳者三好氏に対する敬意からに外ならぬ。事実、訳しにくいふしぶしもある本書を流麗な訳文にこなされた訳者の労を多としたい。〔原著名 Eileen Power, Medieval People, 1924 (1 ed) 東京大学出版会　定価二四〇円〕

—越智武臣—